

「ジェンダー」に関する女子高校生調査報告書 2021

自分のからだ

性と生殖に関する健康と権利（セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス/ライツ）



もくじ



もくじ	2
はじめに	3
ジェンダーの平等と性と生殖に関する健康と権利 (セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス／ライツ)	4
ことばの説明	4
女性の輝ける未来に向けて 一般財団法人日本女性財団 代表理事 対馬ルリ子	6
日本の性教育の現状 助産師／看護師 渡邊安衣子	8
世界の性教育の現状	11
女子高校生の声 自分のからだ	12
調査概要	12
自分のからだ 月経	13
自分のからだ ライフプラン	18
女性のライフサイクルの変化と女性の健康 女性クリニックWe!TOYAMA代表／富山県議会議員 種部恭子	21
自分のからだ 産婦人科受診	22
自分のからだ 性教育	24
学校での性教育の充実と、相談しやすい環境づくりを… 埼玉医科大学 産婦人科 高橋幸子	31
自分のからだ 性的同意年齢	32
日本の性的同意年齢の問題 弁護士 上谷さくら	34
自分のからだ 相談できるところ	35
高校生とユースの声	37
おわりに 未来を守る 公益社団法人ガールスカウト日本連盟 理事 重住恭子	38

はじめに

女性が生涯を通じて明るく充実した日々を過ごす社会を実現するためには、早い段階から「女性特有の健康に関する意識」を高めていくことが必要です。同時に、少女たちの可能性を伸ばしていくためにも、少女の持つ不安を解消し正しい知識を得ることはとても重要なことです。

ガールスカウトは、「すべての少女と女性が自分らしく生きられる社会」を目指して活動をしています。この度、同様の目的を持つ一般財団法人日本女性財団と連携し、世界各国と比べ大幅に遅れている「女性の健康に関する正しい知識や理解」を促進することを目的として、女子高校生を対象にアンケートを実施しました。

アンケート作成にあたっては、国連教育科学文化機関（ユネスコ）が作成した『国際セクシュアリティ教育ガイダンス（5ページ）』に基づき設問を検討しました。しかし、ガイダンスでは5歳の子どもたちに教えることを奨励している項目であっても、日本の高校生年代には質問できないと判断するものが多く、日本の性教育が世界と照らし合わせていかに遅れているのかを認識する機会となりました。

高校生の回答からは、

- ・「自分のからだ」について不安に思っていること
- ・現在どのような性教育を受けていて、どのような教育を望んでいるのか
- ・自分の将来についての意識

など少女たちの現状などを読み取ることができました。

ジェンダーの平等は、持続可能な開発を促進するうえでは欠かせません。少女と女性に対するあらゆる差別や暴力に終止符を打つためにも、包括的な性教育は非常に重要になってきます。そのため、今回の「ジェンダー」に関する女子高校生調査は、性と生殖に関する健康と権利（セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス／ライツ）をテーマとしました。

少女たちが「自分のからだ」について正しく理解し、自らの可能性を信じていることができる環境を整えていくことは、性別に関係なく互いを尊重しあうことのできる明るい社会を作ることにつながるのではないのでしょうか。少女たちが置かれている現状を改善していくために、この報告書をお役立ていただくことを願っています。



『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』とは

国際的な性教育の指針。包括的性教育が非常に重要であることから、5歳～18歳以上までの子どもや若者を対象とし、それぞれの年齢に適したカリキュラムを提供できるよう、ユネスコを中心にUNAIDSやユニセフなどいくつかの国連機関や性教育分野の専門家の協力を得て2009年に初版が発行された。日本語版は2017年に発行、その後、UN Womenも加わり、よりジェンダー平等の実現に向けたものとして2018年に改訂され、2020年に翻訳版が発行された。詳しくは5ページ



国際セクシュアリティ教育ガイダンス【改訂版】科学的根拠に基づいたアプローチ 発行：明石書店 2020年8月10日 初版

ジェンダーの平等と 性と生殖に関する健康と権利

(セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス/ライツ)

まず、ジェンダーの平等を実現するために、なぜ性と生殖に関する健康と権利（セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス/ライツ 以下、SRHR）を理解する必要があるのかをお伝えします。

SRHRは、1994年にエジプト・カイロで開催された国際人口開発会議において提唱された概念で、これには以下の四つのことが含まれます。

自分の人生を自分で選択できる、そんなあたりまえをすべての人に

セクシュアル・ヘルス

自分の「性」に関することについて、心身ともに満たされ、幸せを感じられ、またその状態を社会的にも認められていること

リプロダクティブ・ヘルス

妊娠したい人、妊娠したくない人、産む・産まないに興味も関心もない人、アセクシャルな人（無性愛、非性愛の人）問わず、心身ともに満たされ健康にいられること

セクシュアル・ライツ

セクシュアリティ「性」を自分で決められる権利のこと

リプロダクティブ・ライツ

産むか産まないか、いつ・何人子どもを持つかをなど「生殖」に関することを自分で決める権利のこと

JOICFPウェブサイト参考

これらのことは、すべての人の「性」と「生き方」に関することであり、ジェンダー平等を実現するためには不可欠なことです。

ことばの説明

包括的性教育¹

ジェンダー平等や性の多様性を含む人権尊重を基盤とした性教育のこと。包括的性教育の目的は、性に関することのみでなく次のことを学ぶこととしている。

- ・生涯を通して自らの権利を守ることの大切さを知ることと知識や態度等を身に付けさせること
- ・自らの健康・幸福のための選択を自分で決められるようになること
- ・多様性を認め、個々を尊重すること
- ・人間関係を構築することの大切さ、個々の選択が自己や他者に与える影響への気付きを得ること

性の自己決定

性にかかわる事柄について、自らの責任で決定できること。性行動や性認識は、自分自身のものであり、自分で培っていくもの。



国際セクシュアリティ教育ガイダンス²

『国際セクシュアリティ教育ガイダンス(以下ガイダンス)』は、学校内外における包括的性教育のプログラム教材を開発し実践することを手助けするためにユネスコにより作成された。ガイダンスでは、科学的根拠に基づき、各地域の実情に合わせた信条や価値観・態度・スキルなどの要因を考慮しながら働きかけるために、論理的に設計されたプログラムの必要性を強調している。合わせて、すべての人が健康でウェルビーイング(幸福)となれるよう、数多くの国際的な人権に関する文書(世界人権宣言、子どもの権利条約、経済的・社会的および文化的権利に関する国際規約、女性差別撤廃条約、障害者権利条約など)を基盤として作られている。子どもや若者が自らの健康やウェルビーイング(幸福)となる権利を知るとともに、他者を理解し権利を尊重することができるよう、5~18歳程度の若者を対象にキーコンセプト、トピック、学習目標に分けて書かれている。

キーコンセプトは、以下の8項目で構成され、初等教育・中等教育レベルのが学習者を意図して四つの年齢グループ(5~8歳、9~12歳、12~15歳、15~18歳以上)に分けて学習目標が設定されている。

1. 人間関係
2. 価値観、人権、文化、セクシュアリティ
3. ジェンダーの理解
4. 暴力と安全確保
5. 健康とウェルビーイング(幸福)のためのスキル
6. 人間のからだと発達
7. セクシュアリティと性的行動
8. 性と生殖に関する健康

それぞれのキーコンセプトに2~5のトピックがあり、年齢グループごとに知識、態度、スキルを基盤とした学習目標で構成されている。

月経前症候群(PMS)³

生理の前になると決まって不快な症状が現れ、日常生活に支障をきたす。多くの場合、生理が始まると症状が軽くなり消失する。症状があっても、日常生活に支障のない程度のもは、月経前症候群(PMS)と診断されないこともある。

月経前不快気分症候群(PMDD)³

月経前症候群(PMS)の症状のうち、ココロの症状が特に悪化して日常生活に支障をきたすような症状を月経前不快気分障害(PMDD)という。

性的同意年齢⁴

キスしたり、裸にして体をなめたりなど、“性交”以外の性的行為に対して同意する能力があるとみなされる年齢

性交同意年齢⁴

性交することについて、同意する能力があるだろうとみなされている年齢

参考:

- 1 公益財団法人日本女性学習財団ウェブサイト
- 2 国際セクシュアリティ教育ガイダンス
- 3 バイエル薬品株式会社「生理のミカタ」ウェブサイト
- 4 NHKクローズアップ現代 みんなで“プラス”に変えるVOL.143

女性の輝ける未来にむけて

一般財団法人日本女性財団 代表理事 対馬ルリ子

50年前、日本が高度成長期だった頃、女の子の将来は「お嫁さん」一択でした。何で男の子は、野球選手とかレーサーとか医者とか、いろいろ選択肢があるのに、女の子にはお嫁さんしかないの？それが私の原点です。

昨年、日本女性財団とガールスカウト日本連盟は、高校生の女の子たちに、性と生の意識についてのアンケート調査をおこないました。答えてくださったのは、全国304人の女子高校生たちです。ご協力ありがとうございました。

これで、女の子たちの体や心の実態のいろいろなことがわかりました。例えば、体や心の不調で最も多かった答えは、ニキビ(51.3%)で、イライラ(37.5%) 落ち込み(30.3%) 肌荒れ(35.9%)と続きました。これらの症状に、月経周期による波を感じている人は42.1%にのぼります。特に月経中と月経前に悪化していました。月経にまつわるトラブルで多いのは月経痛(58.9%)、次に月経不順、月経量が多い、月経前の体調不良と続きます。月経にまつわる症状で、学校での勉強や部活動に支障が出るほどの困難がある、と答えたのは39.1%にものぼりました。女の子にとって、月経と気分不調、お肌のことは、とても大きな健康問題になっています。

このアンケートを通じて私たちが知りたかったのは、誰が性教育するか、何を性のあり方として伝えるか、が、女の子たちの性と生の選択の意識に影響するのではないかということです。

ユネスコは、2009年「国際セクシャリティ教育ガイダンス」を作成し、ジェンダー平等や性の多様性を含む人権尊重を基本とした性教育(包括的性教育)の重要性を伝えています。このガイダンスは、子どもたちが、自らの健康・幸福・尊厳、そして尊厳の上に成り立つ社会的・性的関係の構築、個々人の選択が自分

や他人に与える影響、生涯を通して自らの権利を守り、心身および社会的ウェルビーイングを実現するための知識や態度を身に付けることを目指しています。そしてそのエビデンスと、教育を進めるための年齢段階別の学習目標を示しています。日本でも訳本が出版されました。(2020年に改訂版発行)

キーコンセプトは八つあり、1. 人間関係 2. 価値観・人権・文化・セクシャリティ 3. ジェンダー理解 4. 暴力と安全確保 5. 健康とウェルビーイング 6. 人間の体と発達 7. 性的行動 8. 性と生殖に関する健康(セクシャルリプロダクティブヘルス&ライツ SRHR)です。

今回のアンケートでもわかるように、女の子の心身には波があり、月経周期に関連しています。(6割の女の子が、月経がつらい、4割の女の子が、そのために支障をきたすと答えました。)

しかし、それを相談できるかかりつけ医や相談先を持っていないことがわかりました。実際に相談できているのは24.7%です。8割の女の子が、女性医師なら相談しやすいと考えていますが(80.3%)なかなか相談先が身近にないのが現状のようです。



性教育も、医師が中学校や高校でおこなったものが最も印象的であったこと（中学校 28%）。最も受けたいと思っている性教育は、ジェンダーや性差別について（35.5%）性の多様性について（32.2%）ピルやコンドームなどの具体的な使い方について（28.6%）など、時代の趨勢に合った内容であることがわかりました。性暴力を受けた経験がある子、20人以上の性交相手がいる子など、暴力や搾取に曝されている現状も垣間見られました。

女性医師がいるクリニックや性の健康相談クリニック（ユースクリニックといいます）が、地域で相談や教育に関わることができれば、また、大人も一緒に新しい性や生のあり方や意識を学ぶことができれば、女の子たちの将来も変わってくるかもしれません。

日本女性財団は、一人も取り残されることなく、自分の性と生の選択を自分でおこない、自信を持って未来を切り拓けるよう、女の子たちを応援したいと思います。

プロフィール

女性ライフクリニック銀座院長

全国の女性医師らと連携、女性のウェルビーイング実現のため、情報提供・啓発活動・政策提言をおこなっている。

日本女性財団とは

「女性の生涯のWell-beingを支援する」というテーマを掲げ、女性の心身の健康および社会的な活躍を後押し、社会全体に貢献。医師を中心に、専門機関と連携し、女性たちを支援している。

女性たちに、生き抜く力を。

日本女性財団



日本の性教育の現状

助産師／看護師 渡邊安衣子

「妊娠したと女性が気付くのは、いったいどんな体の変化があるからでしょうか？」性教育の講演で私は小・中・高校生に語りかけます。「お腹が大きくなって服が入らなくなる？」「つわりだっけ？ 気持ち悪くなるんでしょ？」そんな声がたくさん聞かれます。「生理が止まる」その正解がなかなか出ません。

「女性の生理は何歳まであるでしょうか？」中学3年生の授業の際、アンケートをとると、男女ともに半数以上が60歳以上と答え、その内、男子の40%は死ぬまでと答えました。

小学生に助産師からのいのちの授業をした際の講座の感想では、「どうしたら受精するかは最大のナゾ！ たぶん先生も知らんと思う。」「結局、人間は体外受精なの？ 体内受精なの？」これは実際に寄せられた質問、感想です。

インターネットの普及で子どもたちは性の知識を山ほど得ているのではないかと、今どきの子どもたちはしっかり性教育を学校でしてもらっているのではないかと、そう思われる方も多いのではないのでしょうか。しかし、子どもたちのリアルボイスを聞くと、果たして現在の日本の性教育はどうなっているのか、そう疑問を持たれる方も多いのではないのでしょうか。

小・中学校の現状

多くの学校では、文部科学省の学習指導要領に沿って、小学4年生の保健で体の発達発育、思春期の変化（二次性徴）の学習、5年生の理科で人のたんじょう（精子、卵子、受精、妊娠、胎児の成長）、6年生の保健で病気の予防について、中学1年生の保健体育科で身体機能の発達、生殖に関わる機能の成熟（二次性徴、妊娠成立）、中学3年生の保健体育科で性感染症（コンドーム）等について学びます。



その他、特別活動（特活）の学級活で、LGBTQやデートDV、ジェンダー平等などの学習の取り組みを入れる学校もあります。また、より学習を深めるために、医師や助産師など、専門性の高い外部講師を招く場合もありますが、それも学校ごとの采配によって変わってきます。

子どもたちは性に関して、多くのことを学んでいるようにも受け取れますが、なぜ冒頭の疑問を持つことにつながるのでしょうか。それは、「性交」と「避妊」について、小・中学校では、取り扱っていないからです。「妊娠したと女性が気付くのは、いったいどんな体の変化があるからでしょうか？」

文部科学省の学習指導要領には、これら性に関する内容で、以下に示すような「はじめて規定」が記載されています。

- ・小学5年生の理科「人の受精に至る過程は取り扱わないものとする」
- ・中学1年生の保健体育科「妊娠の経過は取り扱わないものとする」

精子、卵子、受精、受精卵、妊娠の成立、胎児の成長を学ぶことができるものの、肝心な性交（セックス）や出産については、教科書には記載されていません。生殖に関連付けた二次性徴の説明ができないため、小学校の教科書には、身体におこる変化や事象（月経血や精液が出るなど）の記載にとどまっています。また、小学4年生の保健体育の教科書では、子どもと大人が体操服を着用しているイラストを用いて、男女の身体の発達発育を学習するようなものもありますが、サイエンスとしての体の学習の視点が欠けているように感じます。月経や射精の学習は、男女分かれて授業を受ける学校もまだまだ多数聞かれます。男女別々にされることで、このことは、異性には聞かせてはいけない話なのか、といった性に関する偏見やタブー意識を刷り込むことになり、まさに、隠れたカリキュラムが遂行されているともいえます。男らしさ、女らしさといった社会的な役割と

しての性(ジェンダー)は、差別されることなく、平等であるべきですが、男性と女性の体の機能の違いはあります。その違いを学ぶことで、相互理解が深まり、将来も含め、人は協働していけるのではないのでしょうか。

中学校の保健体育科の教科書には、性感染症について、「性的接触によって感染する」「予防には、感染の危険がある性的接触を避けること、コンドームを使用することなどが有効」と書かれているにとどまり、「性的接触」とは具体的にどのような行為なのか、またコンドームの使用方法についても記載はなく、「避妊」についてもふれていません。

高校の現状

高校になると、性交を理解している前提で学習は進み、学習指導要領では、高校保健体育科で「生殖に関する機能については、必要に応じ関連付けて扱う程度とする」とされています。総じて、曖昧な表現で、よくわからないことが多く、自身の性の健康を守るための具体的なアクションにつながる授業ではなさそうです。

では、子どもたちの置かれている現状はどうでしょうか。インターネットの普及に伴い、低年齢から過激なポルノ情報を簡単に入手できる時代となりました。その刺激を受けて、性行動の活発化、低年齢化が起きている?と予想されがちですが、むしろ男女ともに性行動の不活発化、引き気味になっている現状が調査からも分かります。(図1・2)

一方で性行動が活発化している子どもたちも少数ですが存在しており、2極化も指摘されています。令和2年、10代の中絶数は11,058件、14歳以下の出産数40人、15~19歳の出産数7,742人(厚生労働省)でした。性交開始年齢が早くなる因子として、中学生の頃「家庭が楽しくない」「普段、親と話をしない」「朝食を食べない」「母親や父親の評価が低い」という回答が多かったことがわかっています。(第8

回男女の生活と意識に関する調査報告2017年日本家族計画協会) 家庭に居場所のない子たちだということが推察されます。そのさみしさを埋めるため、SNSで見知らぬ人と会うことで危険な目に合う子どもも増加しています。禁止教育、脅しの性教育では、興味を持たない子どもの否定的なイメージは加速し、さみしさを抱えている子どもにさらに居場所のなさにつながる指導にもなりかねません。

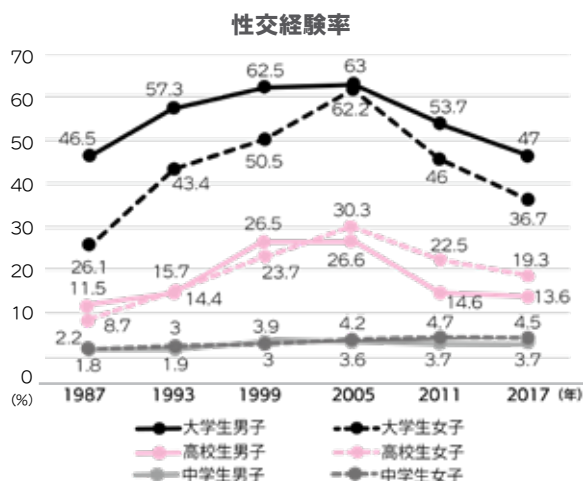


図1) 第8回 青少年の性行動 (2018年日本性教育協会)

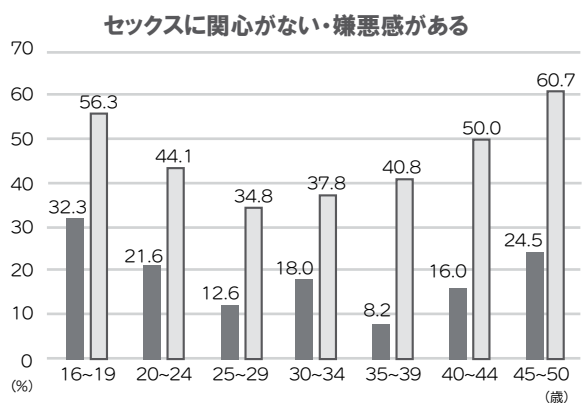


図2) 第8回 男女の生活と意識に関する調査報告書 (2017年日本家族計画協会)

また、中高生のカップル間の暴力、デートDVの問題も指摘されています。国内の調査では、交際経験ある10代女性の内、44%がデートDV被害経験があり、その内12~15歳は52%被害経験があると報告されました。(デートDV白書VOL5)

文部科学省は、このような事態を受け、子どもたちを性被害から守るために、幼児~高校生まで、誰も加害者にも被害者にも傍観者にもしないことを目的とした「生命の安全教育」を令和2年にスタートしました。しかし、あいまいにした表現を用いた状況で、性暴力や性被害について真に理解を得ることが可能なのでしょうか。

では、「性」教育の「性」とはいったい何を指していて、子どもたちにいつから、どのように教育をしていけばよいのでしょうか。性教育に関する国際的なガイドライン・指針がユネスコから2009年に発行されています。『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』です。

子どもたちには「包括的性教育」が必要だと言われています。包括的性教育とは、生殖や体の発達、性感染症といった狭義の性教育だけではなく、人間関係、ジェンダー平等、暴力と安全、人の幸福、人権などより幅広い内容を指しています。包括的性教育を5歳から18歳までに、園や学校などの教育機関で、体系的に、繰り返し積み重ね学ぶことにより、寝た子を起すどころか、将来の性行動が慎重になることが科学的根拠をもとにして示されています。

確かに、知識はもとより、NOと言える、NOや異論を受け入れることのできる人間関係、コミュニケーションの土台ができていなければ、その知識すら活用することができない現実があることは、私たち大人が経験的にも学んできたことです。

ポルノ情報、性被害、SNSトラブル、DV、性的ハラスメント、ジェンダー差別、性に関する課題は山積しています。大人たちもどう教育してよいのか迷っています。そのような中、2020年以降、性教育本の出版ブーム

ともいわれるほど、幼児向けの絵本や親向けの書籍が多数出版されています。この流れを決してブームで終わらせることなく、文化として根付かせる時がやってきています。

2018年に発行された『改訂版 国際セクシュアリティ教育ガイダンス』では、SDGsとの関連を強調しており、「子どもの権利条約」にもふれています。性・生殖の健康と権利に関する教育を受けることは、すべての子どもたちの権利です。教育の保障を約束するためにも、教育を提供する側の大人が、今こそ、性教育をアップデートし、学び直す必要があるのではないでしょうか。

まずは、教師が性教育に関する研修を受けられること、合わせて保護者や地域住民も性教育について学び語れる場が設けられることも効果的だと思います。



.....
プロフィール
愛知県出身。名古屋大学医療技術短期大学部(現・名古屋大学)看護学科・助産学科卒業。総合病院産婦人科・小児科、助産院、京都市こどもはぐくみ室勤務の後、現在は出張開業助産師として、助産院での出産のサポートや女性の個別相談に応じている。

世界の性教育の現状

世界の性教育はどのように進められているのでしょうか？
ここでは、いくつかの国の様子を紹介します。

性教育って何年生から？ 月経については？

オランダ

小学校1年生から「包括的な健康教育」として取り組んでいる。月経について
詳細な説明を男女ともにおこなう（生理用品の使い方、衛生面の説明など）。

ドイツ

ブランデンブルク州

小学校1年生から生活科で男女の生物学的共通点と違いを学ぶところから
始まる。月経周期が大きすぎる場合は病気の兆候かもしれないので月経カ
レンダーをつけることや、月経期間中によく気分が悪くなったり激しい痛みがあ
ったりするなら医師に聞くことなども伝えている。

中国

健康教育として小学校から必修。**小学校4年生から**、リプロダクティブ・ヘル
ス、異性と付き合う際の安全などについて学ぶことになっている。月経時の衛
生として、手当の仕方や痛みなどに対する対応、生活の注意なども丁寧に扱っ
ている。

オースト ラリア

西オーストラリア州

小学校4年生から教科書『初等 健康と価値』として学び始める。「少年と少女
は常に同じ扱いを受けているか」として、日常に起きた問題からジェンダーの問
題を考えるようにしている。

イギリス

小学校1年生からセクシュアリティと人間関係についての教育のガイダンスで
取り組めるようになっている。必須科目としては、**11歳から**科学として学ぶ。

フィン ランド

小学校3年生から環境学（生理学、健康教育分野を含む）として学びはじめ
る。生物学として扱われていることが多いが、性行動には責任を伴うことを語り
かける教科書が多い。

フランス

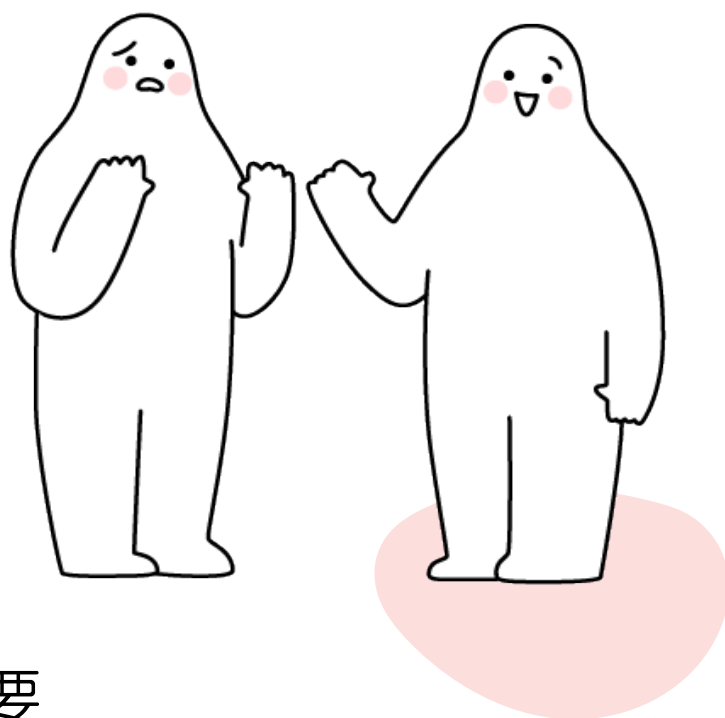
中学から科学の中の生物領域で性教育関連事項が扱われている。

韓国

小学校5年生の教科書『生活の中の健康』として学ぶ。

参照：『教科書にみる世界の性教育』かがわ出版

女子高校生の声 自分のからだ



調査概要

実施期間：2021年2月11日～3月25日

調査方法：インターネット回答 全51問

対象：女子高校生

回答件数：304人(全員からの回答でないものに関しては、n=人数と表記)

目的：グローバルな標準的指針等を踏まえ、日本の女子高校生が「女性の健康」に関する正しい知識や理解を有しているかなどの現状を把握し、現代社会において若年層に必要とされている教育・啓発・サポートについてを社会に課題共有すること

数の処理：文中は、小数点第一位まで明記しているものもあるが、図は小数点以下を四捨五入しているため必ずしも合計は100とはならない。

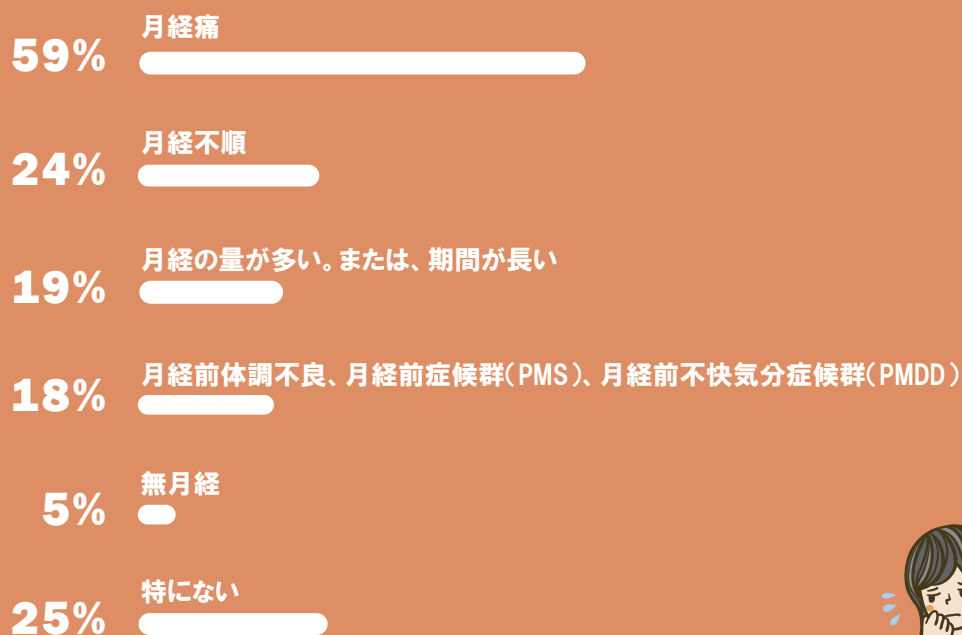
項目作成：一般財団法人日本女性財団・公益社団法人ガールスカウト日本連盟

協力：ウィメンズ・ヘルス・アクション実行委員会

自分のからだ 月経

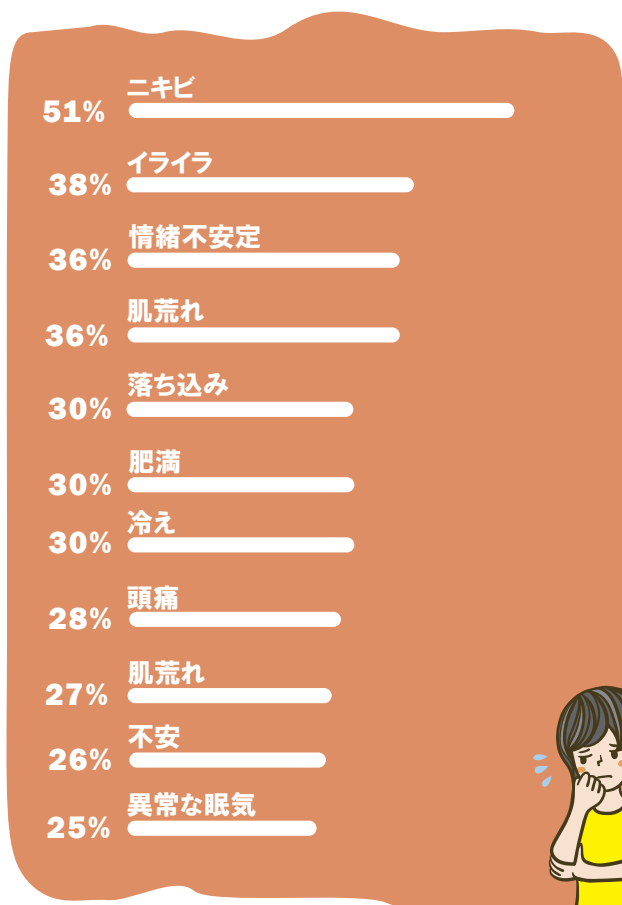
1. 月経にまつわるトラブルはありますか (複数回答可)

3カ月以内に経験した「月経にまつわるトラブル」について問いました。



「特にない」25%を除く、75%の高校生は何らかの月経に関するトラブルを感じています。その中でも59%の高校生は「月経痛」を感じていることがわかりました。

2. 気になる身体や心の不調はありますか (複数回答可)

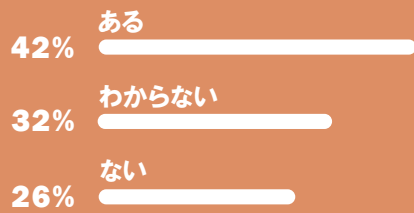


「特にない」との回答はたったの7%でした。半数以上の少女たちはニキビが気になると回答しており、容姿を気にしていることがうかがえます。そのほかにも肌荒れや肥満など外見を気にしているものもありますが、イライラ、情緒不安定、落ち込み、不安など心の不調を感じているとの回答も25%以上のものが多くあり、メンタルへの配慮が必要ということもわかりました。

一人で抱えず、友達や先生、
家族など相談できる人を
みつけられるといいね。

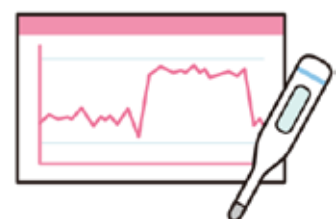
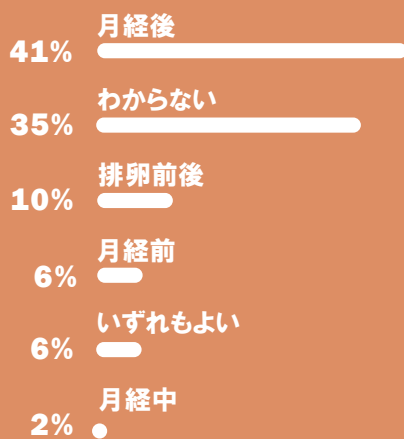


3. 2で回答した不調は月経周期などによる波がありますか



身体や心の不調が月経周期に関係していると思うかを問いました。42%の高校生は月経と身体や心の不調は関係していると感じています。

4. 月経周期のうち、あなたにとって最も調子がよいと感じる時期はどれですか



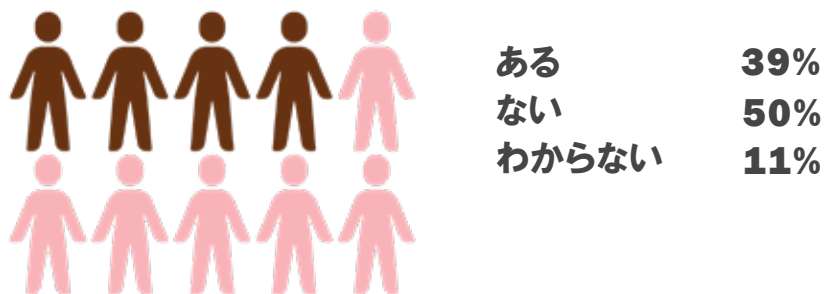
5. 月経周期のうち、あなたにとって最も調子が悪いと感じる時期はどれですか



53%の高校生は月経中に調子が悪いと感じており、25%は月経前に調子が悪いと感じていることがわかりました。

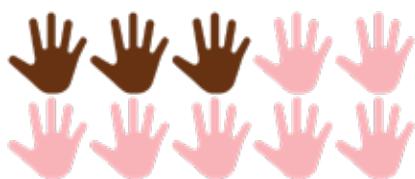
6. 月経痛や月経前症候群（PMS）などにより学校での勉強や部活動などに支障をきたすことはありますか

10人に4人が「ある」と回答



7. 月経の周期を変えたり、止めたりするなどコントロールすることについて、「すべきでない」と思いますか

10人に3人が「すべきでない」と回答



すべきでない	29%
わからない	22%
思わない	49%

「思わない」が49%と、コントロールすることを「問題ない」「してもいい」と回答している一方で、「すべきでない」と「わからない」が50%を超える回答であることから、高校生たちには、状況に応じてコントロールしていくことも必要なことであるという認識がまだ定着していないことがわかります。

受験など大切な行事のときに、月経に関するトラブルで影響がでないように月経周期をコントロールすることは悪いことではないよ。
婦人科で相談してみよう。



性について学ぶ機会に気付いたこと 生理の血液量

2021年10月 ガールスカウト日本連盟が実施した女子高校生を対象とした事業に参加した少女たちの声を紹介します。



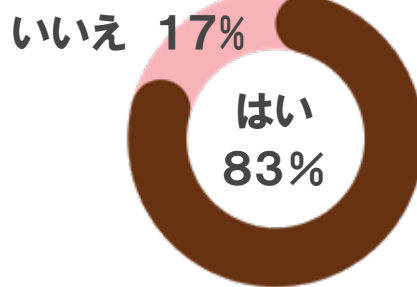
経血に含まれる血液の量が、想像していたものよりもとても少なく驚きました。実際に実習でナプキンに水を吸わせてみると、私のものはスポーツタイプで、とても吸収がよく、水を吸った後の肌触りもあまり気にならなかったのも、予想以上の高性能にまた驚きました。



水を吸わせた生理用品を実際にさわってみて、生理のときは、こんなにも濡れていて不快な思いをしていることを知ることが出来た。

自分のからだ ライフプラン

8. あなたは将来、結婚をしたいと思いますか



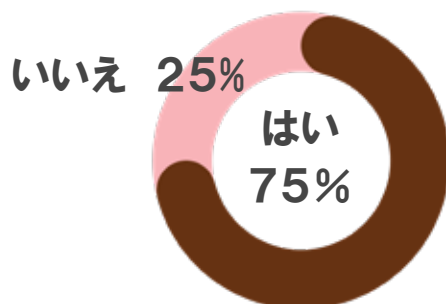
「はい」と回答した人に聞きました (n=251) 結婚したい理由を教えてください

・パートナーと家族になりたいから	27%
・一般的な家庭を築きたいから	24%
・パートナーのことが好きだから	14%
・安定した生活を得るため	12%
・理由は特にならない	8%
・子どもを産みたいから	6%
・その他	9%

「いいえ」と回答した人に聞きました (n=52) 結婚したくない理由を教えてください

・仕事や自分のやりたいことを優先したいから	31%
・結婚するメリットが分からないから	17%
・一人で気楽に暮らしていきたいから	14%
・時間やお金を自由に使いたいから	8%
・形式的な形にとらわれたくないから	6%
・理由はとくにない	17%
・怖い	2%
・今はまだ分からない	2%
・男性が怖い	2%
・自分に相手と共有できるほどの心の持ちようがないから	2%

9. あなたは将来、自分の子ども生みたいと思いますか



「はい」と回答した人に聞きました 子どもを産みたい理由を教えてください (n=228)

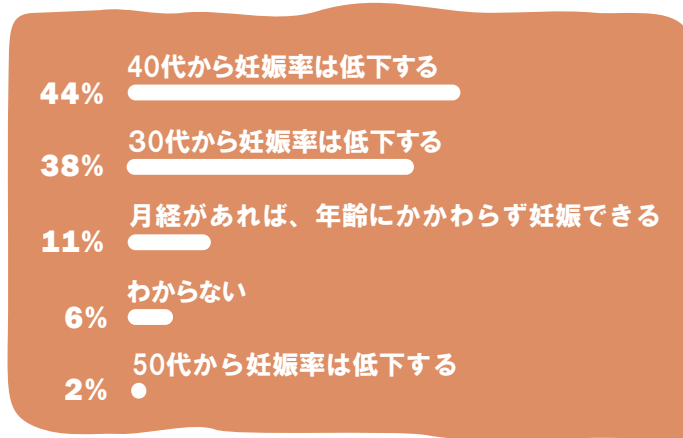
・子どもはかわいいから	39%
・一般的な家庭を築きたいから	18%
・パートナーの子どもが欲しいから	17%
・自分や家族の子どもを残したいから	13%
・理由は特にない	6%
・その他	7%

「いいえ」と回答した人に聞きました 子どもを産みたくない理由を教えてください (n=75)

・理由は特にない	21%
・仕事や自分のやりたいことを優先したい	19%
・出産や子育ての心身の負担が重いから	16%
・子どもが好きではないから	11%
・育児をする社会制度や環境が十分に整ってないから	9%
・性行為をしたくないから	3%
・性行為にトラウマがあるから	3%
・その他	18%

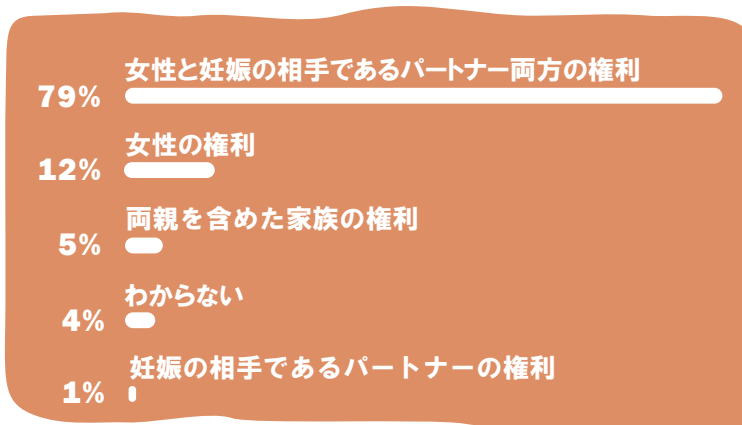
産みたくない、結婚したくない一番の理由は「仕事や自分のやりたいことを優先したいから」でした。「結婚や出産をすると仕事や自分のやりたいことが自由にできなくなる」と考えているからでしょうか。その背景には育児や家事は女性がするものという無意識の思い込み(アンコンシャス・バイアス)があるのかもしれません。

10. 女性の妊娠する力（妊娠率）について



女性が妊娠する力（妊娠率）が何歳から低下していくかを問いました。高校生の回答は、「40代から低下する」との回答が44%と一番多く、「月経があれば、年齢にかかわらず妊娠できる」という回答も11%ありました。日本産婦人科学会の調査結果によると、35歳前後から妊娠率の低下と流産率の増加が認められています。

11. 子どもを産むか産まないか、産むとすればいつ・どんな間隔で何人産むかについての選択は誰の権利だと思いますか



人生設計を立てるには、正しい知識を身に付けることが大切です。

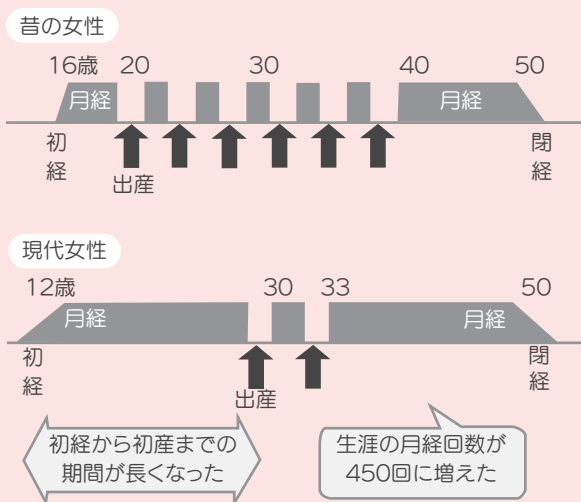


自分の人生の中で、いつどんな仕事をするか、結婚をするかしないか、いつ結婚するかなど自分のライフプランを立てることは大切なことです。「自分の性や身体」について正しい情報と正しい知識を身に付け、「自分で決める」ことができるようになる必要があります。

女性のライフサイクルの変化と女性の健康

女性クリニックWe!TOYAMA代表／富山県議会議員
種部 恭子

この30年で、女性の生き方は大きく変わりました。昭和の時代と比べると初経年齢はやや早まり、初産年齢は約10年遅くなりました。出産する子どもの数は1～2人になり、結果として現代の女性の月経回数は約450回になりました。昔の女性は50～100回しか月経がありませんでしたから、5～10倍月経回数が増えたことになります。



アンケートで示されたように、月経中と月経前にパフォーマンスが悪くなる人が約8割。周期を通じていつもパフォーマンスが良いという女性は少ないですね。450回に増えたのに、男性と同じ条件でベストパフォーマンスを発揮せよ、というのには無理があります。

とくに12歳から18年間、出産もしないのにずっと月経と付き合うこととなりますが、この状態は生物学的に不自然で、月経痛や不妊と関係がある「子宮内膜症」という病気を増やすリスクであることが分かっています。この期間は大切なキャリア形成の時期でもあり、女性は結婚や出産など人生のプランに悩みながら、自己実現に向かって努力を重ねています。ここで子宮内膜症を発症すると、パフォーマンスにも人生のプランにも影響が及ぶことから、病気の予防もかねて月経を積極的にコントロールしたり健康チェッ

クの機会を持ったりするなど、活躍と健康はセットで進める必要があります。

世界的に見れば、月経痛や月経前の不調のコントロール、月経周期の調節などに、低用量ピル（経口避妊薬）を使用するのが当たり前。ピルは子宮内膜症を予防し、女性が産む時期を主体的に決めるために役立つツールです。経済的な格差ができないよう、10代のピルを無料にしている国もあります。

女性には「月経・出産・更年期」という女性にしかない身体的な制約がありますが、これらに揺さぶられて躊躇することなくチャンスをつかみ、存分に活躍してほしいと願っています。何かを諦めたり、何かを我慢したりしないで、キャリアも結婚も子どもも自由に選べるように、これらの制約をコントロールするヘルスケアを誰もが受けられることが、ジェンダー平等の必要条件です。

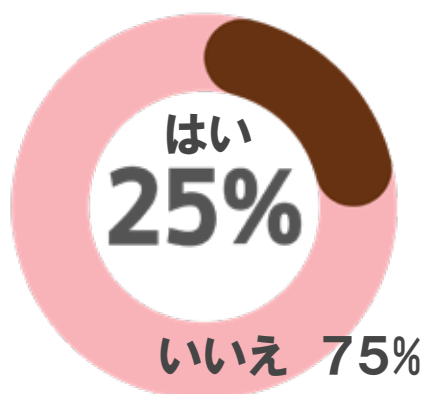
知識と、相談できる場所の整備も必要ですが、女性のヘルスケアを担うプロである産婦人科は、受診のハードルが高いのも事実です。アンケートには、女性医師なら産婦人科に行きやすいというご意見が多く、勇気づけられました。医療界における女性医師の活躍にも、合わせて取り組まなければならないですね。

プロフィール

産婦人科医。医療で解決できない社会課題に向き合うため政治を志す。内閣府第5次男女共同参画基本計画策定専門調査会委員等を歴任。

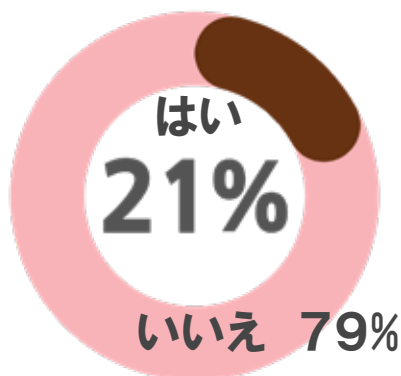
自分のからだ 産婦人科受診

12. 月経異常、体調の不良に関して、かかりつけ医など医療の専門家で相談できる人はいますか



専門家に相談できる人は、たった25%しかいません。

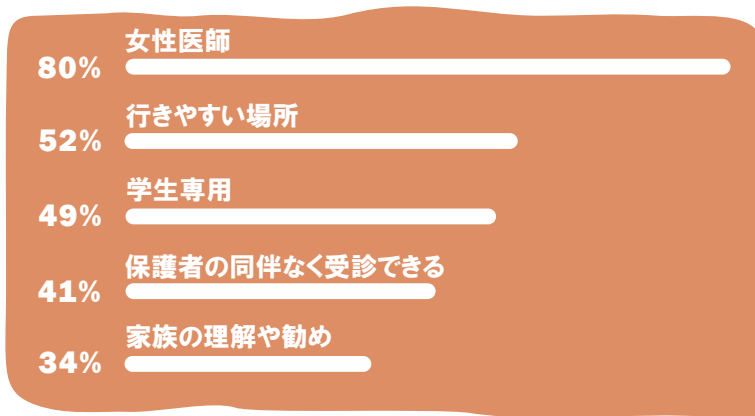
13. これまでに産婦人科や婦人科、レディースクリニックを受診したことはありますか



13ページでは、75%の高校生が月経にまつわる不調を感じていると回答しているにもかかわらず、多くは受診をしたことがなく、受診をためらっている現状がわかります。

14. どのような環境なら産婦人科などに行きやすいですか

(複数回答可)



80%の高校生が女性医師の診察を希望しています。また、34%が家族の理解や勧めがあれば行きやすいと回答しています。

実際に調査に携わった高校生のなかにも、生理が不順、生理痛がひどいなど心配なことがあっても自分から家族に相談できないという人もいました。日頃から、親子で体調について話せる関係を築けると解決できそうなこともありました。そのためには、子どもたちだけでなく、保護者にも性と生殖に関する理解や知識を得る機会が必要です。



健康的に生活をするために、
受診することは大切。



自分のからだ 性教育

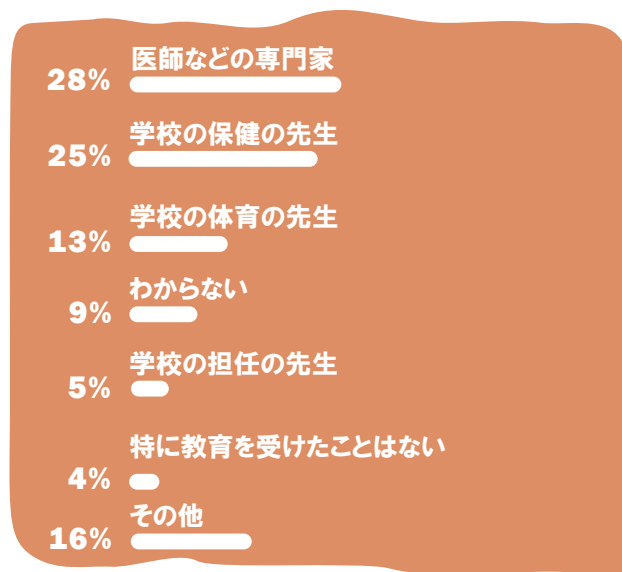
「性教育」を受けたかどうかの問いには少数ではあるものの、「特に受けたことがない」「誰から受けたかわからない」という回答もありました。

15. あなたの受けた性教育で、最も心に残った教育はどれですか



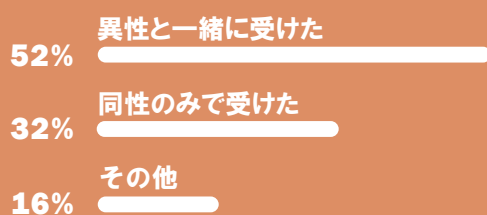
「その他」には、「特に受けたことがない」「友人」「小学校の授業」「テレビ番組」「書籍」「新聞」「家族」「友人」「ボーイフレンド」など、いずれも少数でした。
また、中学校、高校の授業の次に「インターネット」という回答が続きますが、インターネット SNS、YouTubeなどには誤った情報も多く、適切な情報を得られているのかどうか心配です。

16. その性教育は、誰によりおこなわれましたか



「その他」には、「YouTube」「海外映画」「ドラマ」「学校の宗教の授業」などがありました。

17. あなたが受けた性教育の環境について教えてください



その他には、少数ですが「保護者と一緒に」「同性と異性と一緒のとき」があったなどもありました。また、「性教育を特に受けたことがない」「誰から受けたかわからない」という回答もありました。

性について学ぶ機会で見つけたこと

2021年10月 ガールスカウト日本連盟が実施した女子高校生を対象とした事業に参加した少女たちの声を紹介します。



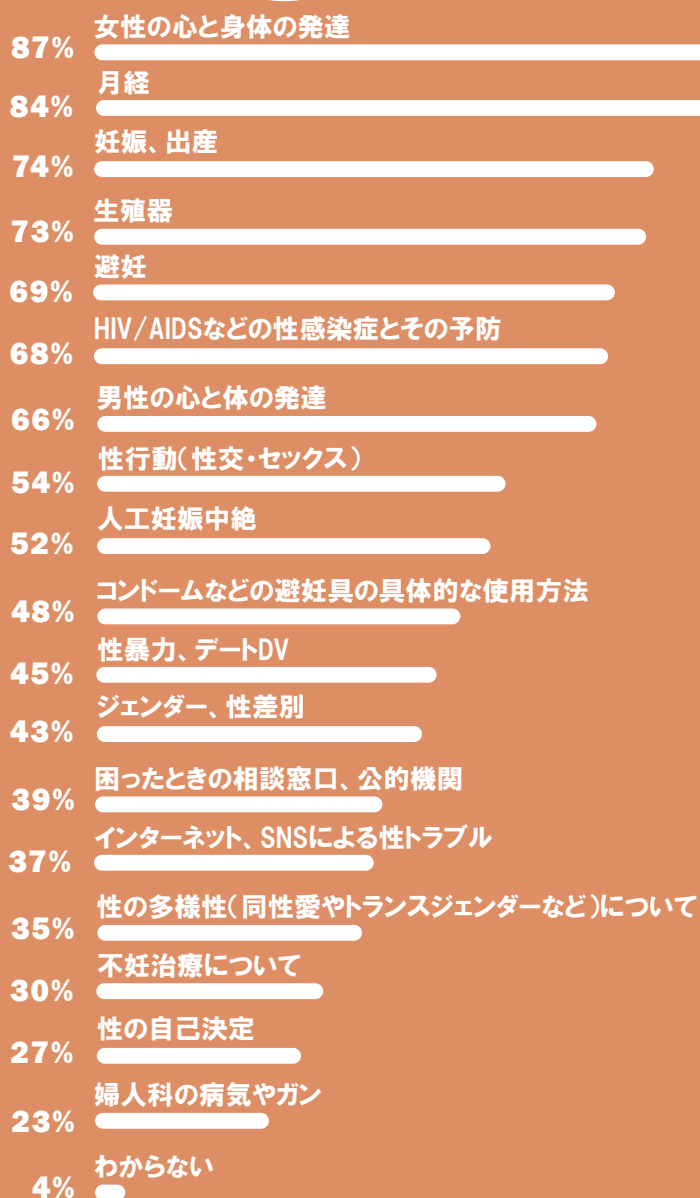
今まで知らなかった、性教育に含まれるさまざまな種類の教育についてや、日本と諸外国との具体的な教育の差などについて詳しく知ることができてよかったです。また、コンドームを触ったり、プライベートゾーンについて話をするのは、私自身抵抗感や嫌悪感があったのですが、それらのことについてしっかりと知識や経験を持っていることの大切さや嫌悪の対象にはしなくてもよいことなど、新しい気づきが多くありました。自分自身の人権を守るためにも、すべての人がきちんとした知識をもち、偏見や偏った知識のみで行動することがないようにすることがとても大切だと実感しました。



性のことについて口に出して言うことは恥ずかしいと思ってしまっていたけれど、自分の身体のことを知り、自分で管理できるようになりたいと思いました。また、性交の同意や避妊、出産をするか、しないかを決めるのは自分自身で決める権利があり、パートナーと話し合える関係づくりも大切だと分かりました。

18. あなたが受けた性教育は、どのような内容でしたか

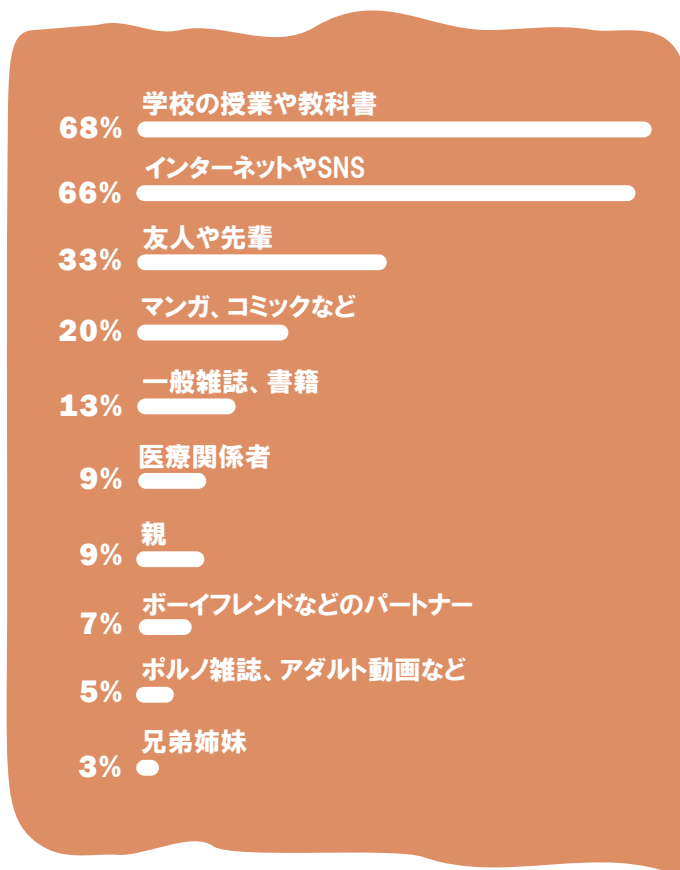
(複数回答可)



体の仕組みや避妊の方法などの説明は一通り受けていると読み取れますが、自分の人生に大切な「性の自己決定」という回答が27%と低いことがわかりました。「自分の身体を健康に保つためにどうしたらよいか」「自分の意思でライフプランを決定していくためにどうしたらよいか」など一人ひとりの人生に大きな影響を与えるという観点での教育が必要と思われます。

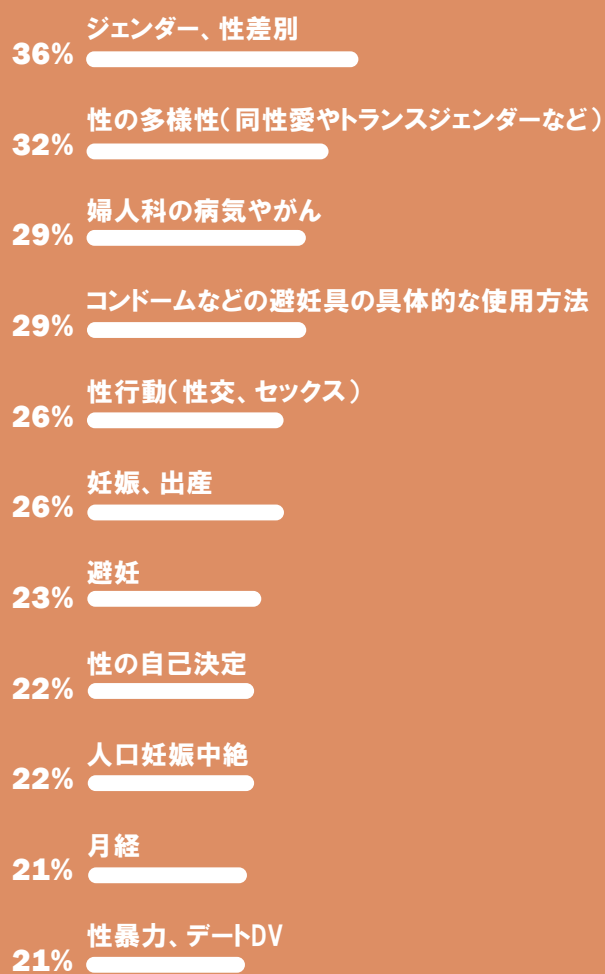
19. あなたは、性に関する情報をどこから得ていますか

(複数回答可)



「学校の授業や教科書」と「インターネットやSNS」がほぼ同数での回答となりました。インターネットやSNSは便利であるため、すぐに検索をしてしまいますが、それが正しい情報であるかの判断ができないことや、使い方を間違えるという問題があり、危険が伴います。26ページの質問18.で「インターネットやSNSによる性トラブルについて教育を受けた」という回答が37%であることから、ネット時代を生きる世代にとっては、これらの教育がさらに重要でかつ、必要不可欠であると言えるのではないのでしょうか。

20. 性に関する教育で、もっとも受けなかった教育は何ですか (複数回答可)



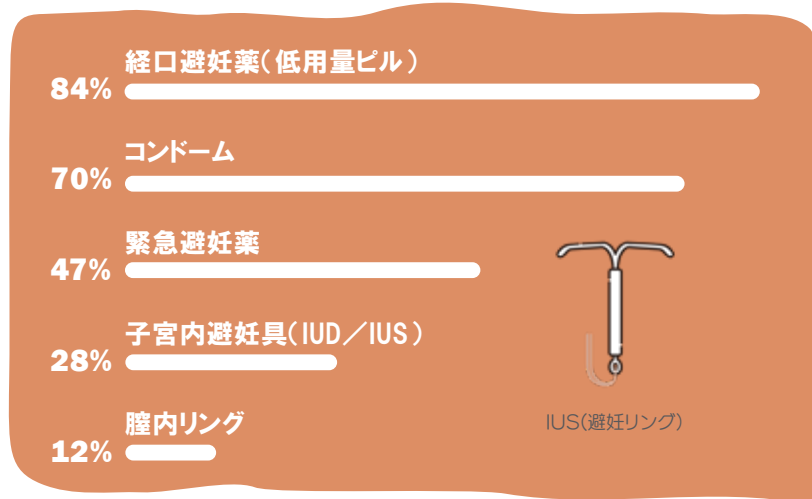
「ジェンダー、性差別」や「性の多様性」についてもっと教育を受けなかったという回答からは、生物学的な性に関する教育だけではなく、人権教育としての性教育を受けたいと思っていることがわかりました。「男らしさ」「女らしさ」に縛られず、自分らしく生きられる社会の実現のためにも「包括的性教育」が必要です。

21. 意図しない妊娠を予防するために、男性によるコンドームの使用だけでなく、女性側が主体的に避妊できる方法やツールがあることを知っていますか

10人に9人が「知っている」と回答



知っていると回答した人対象 (n=261)
国内外で使用できる有効な避妊法で知っているものを教えてください (複数回答可)



他に注射法3%、皮下埋没法1%などの回答が少数あった。



正しい知識を身に付けて、自分の身体は、自分で守るようにしよう。
必要に応じ、病院に相談しよう。

性について学ぶ機会に気付いたこと コンドームについて

2021年10月 ガールスカウト日本連盟が実施した女子高校生を対象とした事業に参加した少女たちの声を紹介します。

💬 コンドームは実際見たことも触ったこともなく、完璧な避妊道具ではない、性感染症を防ぐものなんだと考えながら実習をしました。絶対に自分一人ではやろうとしなかった経験なので、正しい知識だけではなく、体験してみることで大切なんだと思いました。

💬 遠い世界の話だと思っていたけど、自分を守るためにも大切なものだと思います。実際触ってみるとイメージと違ってびっくりすることもありました。

💬 初めてコンドームを触りました。とても硬かったです。全然伸びなかったのでやり方がわかりませんでした。でも、実際に触ってみたり、形を見ることで分かりやすいです。このような体験型の学習を学校の授業で中学生や高校生でおこなえたらいいのになと思いました。

ここにある高校生の声は、2021年10月にガールスカウト日本連盟が主催した「レンジャーonlineイベント」で実施したプログラムに参加した高校生たちのふりかえりを一部抜粋したものです。

講師：助産師・看護師 渡邊安衣子さん
協力：びわこんどーむ（実習用コンドームを提供いただきました）



学校での性教育の充実と、 相談しやすい環境づくりを

埼玉医科大学 産婦人科 高橋幸子

今、日本では「性教育は運次第」と言われています。学校によっては段階的なカリキュラムを独自に作成して包括的な性教育に取り組むところもあれば、教科書をさっと読むだけという学校もあります。今回のアンケートでは、高校生が学校でどのくらい性教育を受けているか、またそれがどのくらい印象に残っているかが明らかになりました。

性の情報をどこから得ていますか？という質問では、1位学校の授業や教科書(67.8%)2位インターネットやSNSなど(66.4%)3位友人や先輩(32.9%)でした。性教育の環境については、同性のみで受けた(32.2%)異性と一緒に受けた(52.3%)で、男女共習で学んでいる環境も多いとわかります。

あなたの受けた性教育で最も心に残った教育は次のどれですか？という質問では、1位が中学校の授業(27.6%)2位が高校の授業(21.4%)4位が医師等専門家による講演(10.9%)でした。また、その性教育は誰によっておこなわれたものでしたか？という質問の答えは、1位医師等の専門家(28.0%)2位保健の先生(24.7%)3位体育の先生(12.5%)でした。学校の先生による性教育(合わせて37.2%)も、外部講師を活用した性教育も、生徒の心に残っているということがわかりました。

今はいろいろな情報がネットやSNSから勝手に入ってくる時代だからこそ、あらかじめ正しい知識を伝えておき、性に関する情報の取捨選択ができるように備える、それが学校での教育の役割だと思います。我が子ひとりだけが知っていればよいというものではなく、クラスや学年、学校全体など集団での共通認識としての性教育が必要なのです。広い目でみればどの学校でも必要だということです。残念ながらそもそも外部講師による性教育の時間はないという学校もあります。学校の先生方と外部講師でタッグを組んで性教育がおこなわれることが望まれます。

また、大人こそ性教育を学ばなければいけないということが明らかになりました。性に関する教育についてあなたがもっとも受けたかった教育は？という質問では、圧倒的1位はジェンダー・性差別(35.5%)

2位は性の多様性(32.2%)です。人権教育としての性教育を若者も望んでいるのだということがわかりますが、これらの分野を自分で教えることができる教師や保護者はどのくらいいるでしょうか。子どもだけではなく、大人にも性教育を学ぶ機会が必要ですね。

世界の性教育の指標とされている『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』には、それぞれの該当年齢で学ぶべきことが書かれており、これらに沿った性教育が求められています。性教育の最終的な目標は「パートナーとのコミュニケーションとしての豊かな性(しない、を含む)」です。一人一人が尊重される教育が保証されることを期待しています。

性の健康(心と身体の健康、性と生殖、ジェンダー平等、性暴力、性感染症などの悩み等)について誰に相談しますか？1位友人(40.8%)2位家族(23.7%)3位SNS(14.8%)に対し、性の健康の問題をあなたが解決しようとする場合、どのようなサポートが必要であると思いますか？には産婦人科等の医療機関の専門外来(47.4%)が圧倒的に多く選ばれました。しかし、産婦人科や婦人科、レディースクリニックを受診したことがありますか？には、はい(21.4%)と、性の健康の問題を解決できる場所として医療機関が認識されていても、受診にはつながりにくいことがわかります。

若者が性の健康について気軽に相談できる思春期外来やユークリニックのような場所が求められることがわかりました。SNS等での発信が玉石混交であることを踏まえ、学校で性教育が受けられること、性の健康について相談できる医療機関につながりやすい環境があること、両輪で進めていく必要があります。

プロフィール

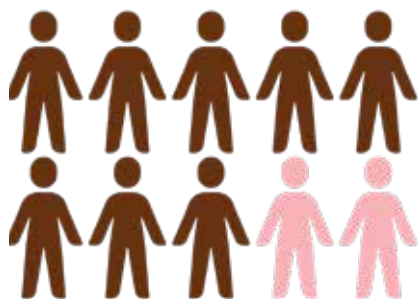
埼玉医科大学病院 産婦人科医 JFPA思春期クリニック
非常勤医師。全国の小学校・中学校・高等学校にて性教育の普及・啓発に尽力している。

自分のからだ 性的同意年齢

22. 身体のプライベートな部分がどこか知っていますか

プライベートゾーン:水着で隠れるところ・くち

10人に8人が「知っている」と回答



はい	81%
いいえ	19%

19%の高校生は「知らない」と回答しました。プライベートゾーンは、身体の中で守られるべき大切な場所であるということは、すべての人が知るべきことです。

同意なくプライベートゾーンを見たり触れたりすることはできません。嫌なことは「イヤ」という権利があることを理解できる教育が必要です。

性について学ぶ機会で見つけたこと 性に関すること

2021年10月 ガールスカウト日本連盟が実施した女子高校生を対象とした事業に参加した少女たちの声を紹介します。



性行動や暴力と安全、体の発達や人間関係全部含めて包括的性教育として大切なものなどを知りました。隠れたカリキュラムは日常にたくさん潜んでいて、私も心当たりがあったのでこれから気を付けていかなければならないと思っています。新しく知った言葉や話題は調べて自分のものになりたいです。



日本が性教育後進国だということを知りませんでした。日本は世界的にみても教育が充実してるし、先進国と言われているので尚更、驚きました。今回、助産師の先生のお話のなかで、いいと思ったのは年齢に合わせて、レベルを分けて性教育をしていくと良いことです。

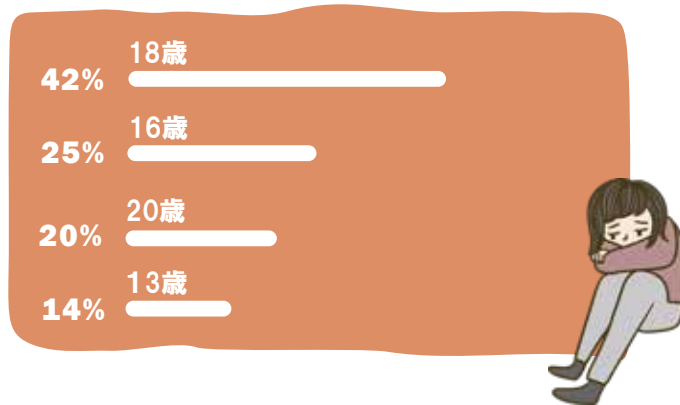


私は、性のことを人より分かっているつもりでしたが、分かっていないことが分かりました。



学校では習わないことがたくさんあり新しい知識が身に付いてよかったです。学校でも、もっと教えるべきだと思いました。

23. 日本の刑法における性的同意年齢は何歳だと思いますか



高校生以上の年代（16歳～20歳）であると考えた回答が約87%でした。
日本の性的同意年齢と性交同意年齢は13歳です。性的な行為がどのようなものかという教育を受けていない13歳を性的同意年齢とする日本の現状には、問題があります。

あなたが嫌だと思うときは、相手が誰であつても「イヤ」と言っていんだよ。もしも同意のない性交が起きてしまつても、「イヤ」と言えなかつたあなたは悪くないよ。35ページにある「ワンストップ支援センター」に電話して相談しよう。



世界の性交同意年齢

アメリカ(州により異なる)	16歳～18歳
イギリス、カナダ、ロシア	16歳
フランス、スウェーデン	15歳
ドイツ、イタリア、中国、台湾	14歳
日本	13歳

性的同意

“性交”以外の性的行為に対して同意する能力があるとみなされる年齢のこと

性交同意年齢

性交、つまりセックスすることについて同意する能力があるだろうとみなされている年齢

NHK クローズアップ現代 みんなでプラス“性暴力を考える”VOL.143より

<https://www.nhk.or.jp/gendai/comment/0026/topic029.html#01616901>

日本の性的同意年齢の問題

弁護士 上谷さくら

性的同意年齢とは、キスやSEXなどの性的行為について、同意する能力があるとみなされる年齢のことです。日本では、刑法が定められた明治時代から現在までずっと変わらず「13歳」と定められています。

13歳というと、中学1年生か2年生です。つい数日前までランドセルを背負っていた子もいます。13歳になったとたん、レイプされたり無理やり胸を触られたりしても、「暴行や脅迫をされたので断れなかった」ということを被害者が立証できなければ、加害者は処罰されません。それが日本の現状です（ただし、加害者が「親」などの監護者であれば18歳未満の未成年者は保護されます）。

日本の小中学生は、学校できちんと性教育を受けていません。性に関する知識がほとんどないまま大人になるので、大人も性に関する知識が乏しく、誤った情報が蔓延しています。その状況で、13歳以上の子が性的行為について同意する能力がある、と一律に法が決めていることは正しいのでしょうか。

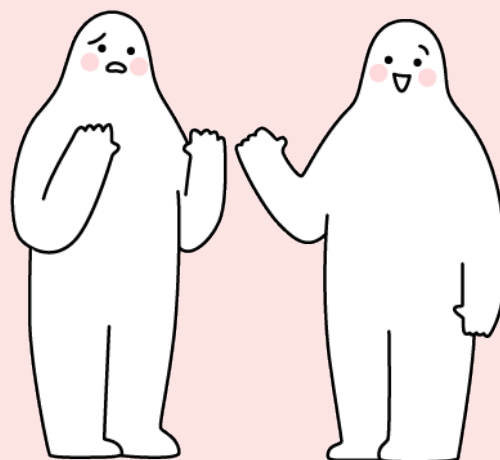
悪意ある大人たちから性的に搾取され、心身に大きな傷を負う若年者が後を絶ちません。そのため、性感染症や将来的な不妊、妊娠中絶等の問題が起きています。幼い故に妊娠したこと自体に気付かなかったり、妊娠を誰にも相談できずに中絶できる期間を経過してしまい、一人で生み落として赤ちゃんを遺棄し、逮捕されてしまう事件も起きています。その場合、赤ちゃんの父親となった男性は罪に問われません。女の子だけが一方的に全てのリスクを負っているのです。

それにも関わらず、性的同意年齢の引き上げに反対する人たちがいます。その理由は、「若年者の性行為の自由を保障すべき」「若年者同士の恋愛の自由は守られるべき」といったものです。しかし、13歳の子が、自由に性行為を伴う恋愛を謳歌するほど正確な性的知識を持ち、それに耐えうるまでに心身が成熟していると言えるのでしょうか。

性的な知識は、生きていくために不可欠なものです。学校できちんとした性教育を受けられないことはとても残念ですが、分かりやすい本が出版されたり、学生向けに講演をする産婦人科医や助産師さんも

増え、社会的な関心も高まっています。現在、法務省で性的同意年齢を引き上げるための刑法改正の議論がおこなわれており、それに関するニュースがたくさん流れるようになりました。

性的同意年齢の問題は、誰もが性被害に遭わない世の中にするための第一歩と言えます。法律がどう変わっていくのか、どう変わるべきなのか、自分のために考えてみてください。

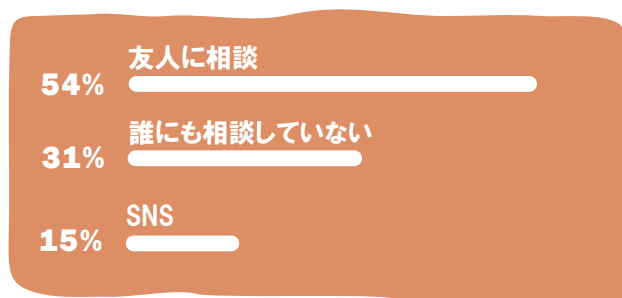


プロフィール

福岡県出身、青山学院大学法学部卒。第一東京弁護士会所属。犯罪被害者支援弁護士フォーラム事務次長。著書『おとめ六法』（共著、KADOKAWA）など

自分のからだ 相談できるところ

24. 望まない性行為（レイプ含む）を強要されたとき、あなたはどうしましたか (n=13)



望まない性行為を強要されたことがあると回答した13人に聞きました。
54%は友人に、15%はSNSで誰かしらに相談したものの、31%は誰にも相談していないと回答しました。

どこに相談していいかわからない、警察で何と言っていいかわからないなどのときは迷わずワンストップセンターに相談しましょう。どうしたらいいかわかり添って、考えてもらえます。

もし性被害にあってしまったら、すぐに地域のワンストップ支援センターに電話で相談しよう。
#8891（はやくワンストップ）と覚えておこう。
最寄りのセンターにつながるよ。一部のIP電話、PHSなどからはつながりません。その場合は支援センター一覧ページ(内閣府ホームページ)に記載されている電話番号にかけよう。

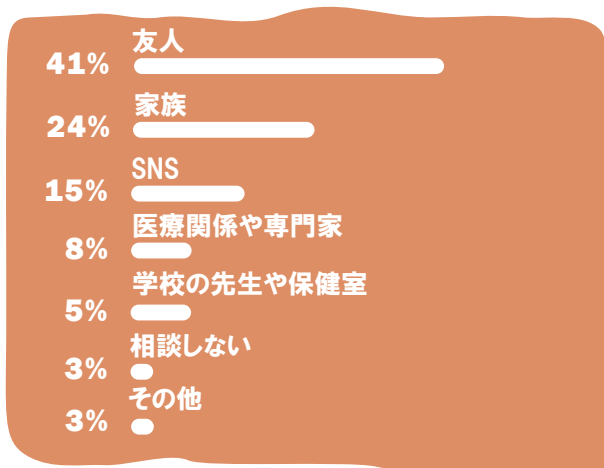


ワンストップ支援センター

ワンストップ支援センターは、性犯罪・性暴力に関する相談窓口です。
産婦人科医療やカウンセリング、法律相談などの専門機関と連携していて、被害直後から総合的な支援をおこなえるようになっています。全国47都道府県の性犯罪・性暴力被害者のためのワンストップ支援センター一覧ページ(内閣府ホームページ)から確認できます。

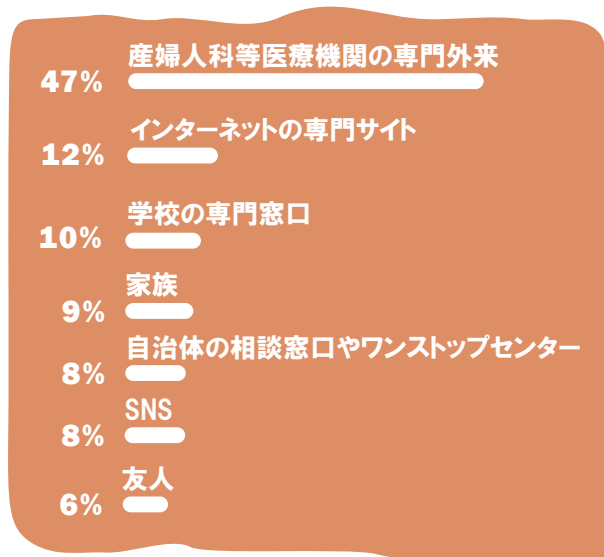


25. あなたは「性の健康」について、誰に相談しますか



「性の健康」とは、心と身体の健康、性と生殖、ジェンダー平等、性暴力、性感染症などの悩みについてを指します。調査では、友人や家族、SNSを使って相談する高校生が多く、保健の先生や専門家という選択をすることが少ない傾向にあることがわかりました。インターネットでも専門家が正しく対応してくれる窓口を知り、適切な対応をしてもらうことが必要です。まずは相談相手を見つけること、相談窓口を確認することが大切です。

26. 性の健康の問題をあなたが解決しようとする場合、どのようなサポートが必要だと思いますか



47%が産婦人科等の医療機関の専門外来であると回答しました。一方でいらないという回答もわずかでしたがありました。

高校生とユースの声

女子高校生調査報告会に携わった高校生2人と、ユース年代のリーダーの気付きや思いを紹介します。

「私は、私のことを知らない」
これが今年の調査報告書を読み、探求した後の率直な感想です。私は、学校で性教育を1時間しか受けた記憶がありません。その授業も、ただ動画を見せられただけのもの。だから私は、日本が海外に比べ性に関する教育が遅れていることを知ることもできませんでした。それなのに日本の性的同意年齢は13歳ととても低く、私たちは知識がないのに判断を強いられています。自分が何をされたら被害者になるのかも、触れられてはいけない場所がどこなのかも知らない私たちです。性の知識や話はタブーであったり、恥ずかしいことのように扱われたりすることがありますが、性を学ぶことは自分の体を学ぶこと、自分を知ること、安全に暮らすための情報を学ぶこと。性教育が充実した社会を目指していきたいです。
(なお 16歳)

調査に回答したり、報告書を読んだりすることから気付くことがあるね。
そして、気付いた問題を解決するために自分ができることを考え、行動する機会にもなるね。



私は、月経不順でいつ月経がくるか分かりません。今回、高校生調査を見て同じように思っている人がいるんだと知りました。また、産婦人科などで相談したことがある人の数は少ないということも知りました。もちろん私も相談したことはありません。産婦人科は妊婦さんが行くというイメージが強いからだと思います。妊婦さんじゃなくても、もっと行きやすい産婦人科が全国にあればいいと思います。もっと自分の体を知り、生活を送りたいと思いました。
(さえ 17歳)

私は「ジェンダー」や「多様性」というものに興味がありましたが、名前を知っているだけで学ぶ機会もなく成人しました。大人になってから自分の興味で学び始め、この調査報告書に出会うことができました。私は、高校生たちとは10歳も年齢が離れていないのに、学ぶ環境は異なり、数年前とは社会は変化しています。それでもまだまだ、社会課題は多く、行動しないと変わらないことばかりです。誰もが生きやすくより明るい未来になるよう、私も行動していきます。
(ゆきこ 21歳)

おわりに 未来を守る

公益社団法人ガールスカウト日本連盟
理事 重住恭子

私たちは、少女たちが感じているジェンダーについての現状を理解するため、2019年から2021年の3カ年に渡り継続的に、高校生調査および大学生調査をおこなってきました。これらは女子高校生・女子大学生の生の声を聞くことが出来る貴重なものと捉えています。

現在ガールスカウト日本連盟は、『「すべての少女と女性が自分らしく生きられる社会」を目指して行動する女性を育てる。』をビジョンに掲げ、活動しています。また、持続可能な開発目標(SDGs)の17の目標の一つである「目標5 ジェンダー平等を実現しよう」に積極的に取り組んでいます。これは、少女と女性の置かれている現状を改善し、彼女たちの可能性を伸ばすための取り組みであり、SDGsすべての目標の基になると考えたためです。少女たちの暮らしている現実の世界を見ると、いまだに多く残る固定観念やジェンダーバイアスによる男女差別や生きづらさ等、さまざまな課題が内在しています。私たちのビジョン達成のためには、少女や女性の成長を阻むものや現代社会に存在しているたくさんの障壁を排除していかなければなりません。

今回の調査から見えてきたことは、高校生が感じている「身体についての心配や迷い」や「将来への不安」でした。今までの調査や聞き取りの中からも「こんなに生きにくい社会ならば大人になりたくない」「大人になるのが怖い」「女の子だからあきらめる」「仕方ない」という声と、「未来はこうなってほしい」「そのために、声をあげたい」「行動したい」という前向きな声が多く聞こえてきました。私たちは、彼女たちが感じるこのような現状の不安を取り除きたいと考えています。自ら未来を切りひらき、自分らしく生きることができるライフプランを築いてほしいと考えています。

そのためには正しい知識を幼いうちから身に付ける必要があります。女性だけでなく、だれもが自分の人生をどのように生きていくかを前向きに考え、構築できるような総合的教育の低年齢からの実施が強く望まれます。つまり、私たちは包括的性教育(人権教育を含む)の早期導入および徹底が必須と考えます。性の健康に関して不安を感じたとき、相談できる場につながることの出来る環境があることも大切です。自分自身の未来を守り、生きるチカラをはぐくんでほしいと思います。

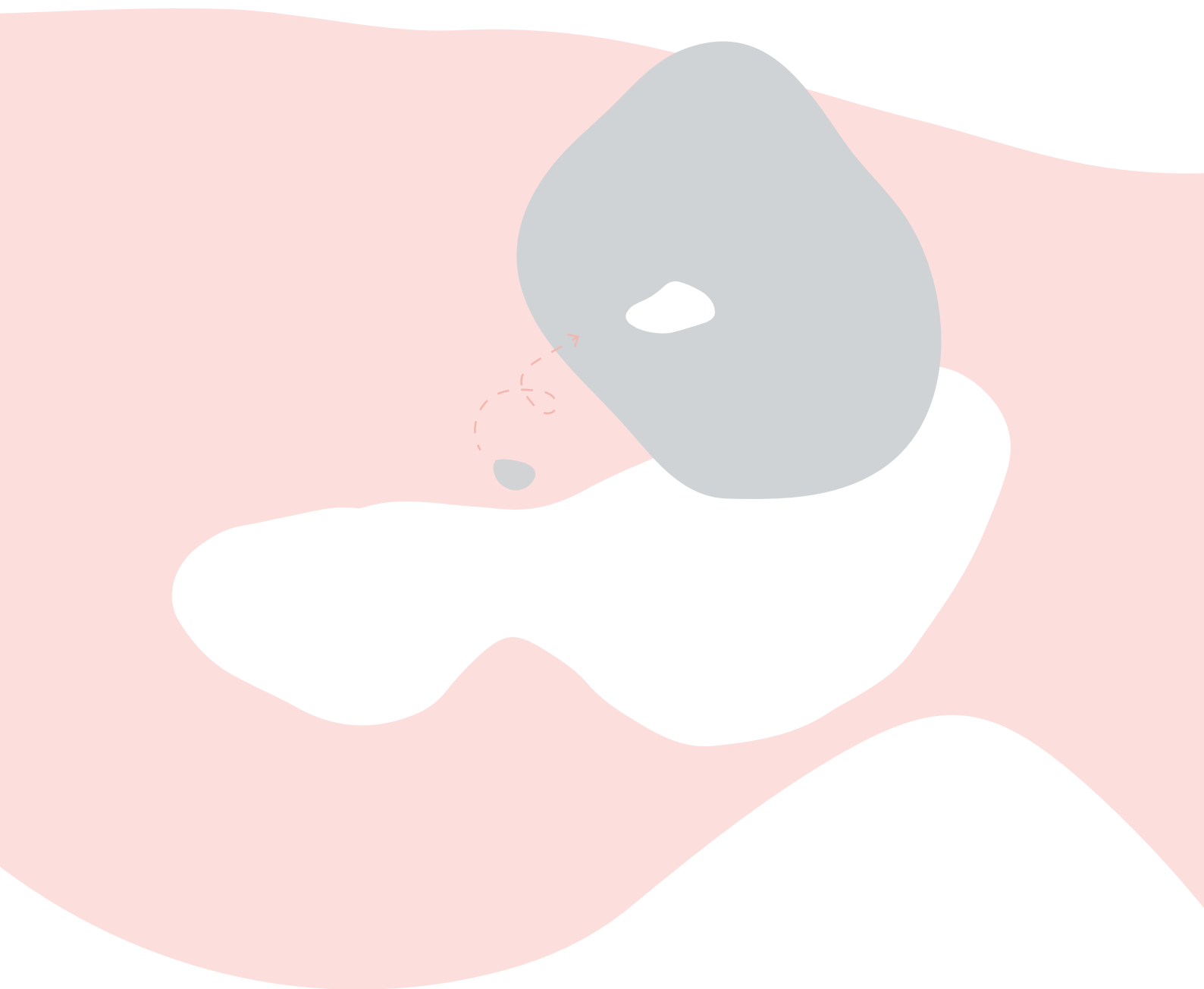
さらに重要なのが、サポートする大人の存在です。周りの大人(指導者、保護者、影響をおよぼす力をもつ人等)は子どもたちの可能性を阻まないために、大人自身が正しい知識を身に付ける必要があります。子どもたちに接する機会の多い大人こそ、変化する実情や流れに敏感に対応し、成長する子どもたちの障壁とならないように、自分の固定観念等を押し付けないように、声掛けや行動に留意する必要があります。大人も共に学び、現状に即した指導や声掛けができるように成長していかなければなりません。

社会は変化します。そして変えることができます。私たちのおかれている現状を真摯に見つめ、どのように改善すればより住みやすい社会になるかを、考えていきたいと思います。性別にかかわらず大人も子どもも、一人ひとりが課題に向き合い、行動し、声をあげていきましょう。踏み出した小さな一歩は、次第に社会を変える大きなうねりとなると確信しています。



ガールスカウト日本連盟が発行している「ジェンダーに関する」調査報告書

- ・ 高校生が感じるジェンダーバイアス 「ジェンダー」に関する女子高校生調査報告書 2019
- ・ 女子大学生×ジェンダー調査報告書 2020
- ・ 「ジェンダー」に関する女子高校生調査報告書 2020 ～声をつなぐ～
- ・ 「ジェンダー」に関する女子高校生調査報告書 2021 自分のからだ
性と生殖に関する健康と権利(セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス/ライツ)



発行：公益社団法人ガールスカウト日本連盟

〒151-0066 東京都渋谷区西原1丁目40番3号

<https://www.girlscout.or.jp/>

この資料に関するお問い合わせ stv@girlscout.or.jp

2022年3月発行

価格 1,000円＋税